その他

「自然保護教育・自然体験学習」分野の 基礎文献・関連文献についての紹介

加賀芳恵*・石山雄貴*・丸谷聡子**・李曉曄*・野田恵***・秦範子*・降旗信一*
東京農工大学大学院*・同志社大学大学院**・東京農工大学（非常勤）***

Literature Introduction: Nature Conservation Education

Yoshie KAGA*, Yuki ISHIYAMA*, Satoko MARUTANI**, Li XIAOYE*,
Megumi NODA***, Noriko HATA*, Shinichi FURIHATA*
Graduate School of Tokyo University of Agriculture and Technology*, Graduate School of
Doshisha University**, Tokyo University of Agriculture and Technology***
(受理日 2013 年 5 月 27 日)

I はじめに

日本環境教育学会誌『環境教育』では、学会 20 周年記念特集号（41 号～43 号）において、それまでの環境教育研究の動向についての総括を行った。この 20 周年記念特集号でとりあげられた 8 分野の 1 つの「自然保護教育・自然体験学習」分野のフォローとその後の研究成果をまとめることを趣旨とした本特集において、この分野の初学者に知っておいてほしい基礎文献・関連文献の紹介を行うことが本稿の目的である。

自然保護教育については伊東・小川（2008）、小川（2009）が、自然体験学習については降旗・宮野・能條・藤井（2009）が、それぞれの分野を系統的に概観して、おりそこでは基礎文献・関連文献も紹介されている。本稿では、上記 3 論文の発表以降の研究成果も含めた「自然保護教育・自然体験学習」分野としての文献紹介を行う。環境教育研究は広範な領域に広がっており、その研究活動も年々進展していることから、上記の「（8 分野の 1 つである）自然保護教育・自然体験学習」分野という位置づけが将来見直される可能性もあるが、現時点で考えられる限りの最上の方法として、筆者らが採用したこの文献の選定方法は次の

とおりである。

まず本特集号の執筆者全員に本稿の企画趣旨を伝え、文献の紹介の依頼を行った。（2012 年 12 月下旬）多忙な執筆者が多かったが、この依頼に対して 2 名の執筆者から 53 文献が紹介された。（2013 年 2 月中旬）紹介にあたっては、各文献に 150 字程度の紹介文をつけてもらうよう依頼したが、文献のみの紹介の場合もあった。このため 2 名の執筆者のうち 1 名については、筆者の一人が直接、各文献の位置づけ（なぜこの文献が重要なのか）についてヒアリングを行い、その結果を IC レコーダーから聞き取り文字データ化した。また各文献については可能な限りコピーまたは原本を入手し、PDF 化した。（一部の文献については、この時点では表紙と奥付のコピーしか入手できないものもあったが、原本の所在は確認した。）（2013 年 3 月上旬）

次に、紹介された 53 文献をリスト化し、各文献情報、紹介文、PDF 化の状況を一覧として記載した一次集計表を作成した。この一次集計表と、一次集計表の文献情報をラベルとして作成し、環境教育を専門とする大学院生 15 名の協力を得て文献の分類と本稿の構成立案のための 2 時間のワークショップを実施した。（2013 年 3 月 30 日）

問い合わせ先 〒183-8509 東京都府中市幸町 3-5-8 042-367-5877

ワークショップは博士課程所属院生をリーダーとする3人がグループとなり、一次集計表と文献ラベルをもとに、類型化を行い、各グループの構成案を発表した。この際、作業の途中で各グループの中で必要と思われる文献の追加を行った。最後に全員の投票により1グループの構成案を選び、全てのグループで追加された文献を追加して最終構成案とした。この結果、17文献が追加され70文献となった。続いてこのワークショップ参加者を中心に本稿の執筆者を募り、この70文献をもとに本稿の第一次案を作成(2013年4月17日)したところ、この段階で追加すべきと判断された文献3点、削除すべきと判断された文献が2点あり、第一次案における文献数は、冒頭に示した3論文を加えた71文献となった。これが現時点でのこの分野における基礎文献・関連文献数である。

以下の記述は、この最終構成案と一次集計表の記述内容をもとに編集・整理を行った結果である。本作業は限られた時間の中で行ったこともあり、十分に整理しきれなかった点がある。こうした点は今後の課題とさせていただきたい。(加賀芳恵・降旗信一)

Ⅱ. 自然学習

1. L.H. ベイリの自然学習の思想

自然体験学習の源流の一つとして自然学習(Nature Study)があり、それは1890年代以後のアメリカで農業と農村の救済を目的とした運動として展開された。その運動におけるもっとも影響力のあった指導者の一人としてL.H. ベイリが執筆した「自然学習の思想」(ベイリ 1972)は、進歩主義教育思想の古典の一つとして著名である。ベイリ(1972)は、自然学習の目的を「すべての人が、その職業のいかんをとわず、内容のより豊かな生活をする」とし、その意義を「直接的な観察によって、彼ら子どもの生活環境における普通の事物・経験をより知り愛するように生徒の心を開かせる運動」と述べている。それは従来の教科目につけ加わった一つの教科目として扱われるのではなく自然と共感するような態度・方法で

あり、学校教育の範囲を超え、社会教育、自然保護運動においてもとられる態度・方法としての「自然学習」なのである。(宇佐美 1969)またベイリの自然学習は農産物の価格の低下など当時の農村をめぐる諸課題の解決を目指す「農村生活運動」(the Country-Life Movement)の中核的役割に位置し(宇佐美 1969)、環境を守るための教育活動としても扱われていた。ここではベイリの自然学習、自然学習運動の教育的意義や農村・農業における意義、その際の自然の解釈の方法などが語られている。宇佐美(1972)は、ベイリによる自然学習の理論・実践について、当時のアメリカと日本の自然と人間との関わり合いの状態にいろいろな差異があることを認めつつも、日本の農村の過疎化や学校教育における自然と人間との関わり合いについて問題意識を持たせる機会が乏しい状況を念頭に置くと、それは人間が自然を忘れ自然から離れつつある事態への批判としての評価している。

さらに、L.H. ベイリの自然学習の思想をより詳しく理解したい場合には、『L.H. ベイリの「自然学習」－アメリカ進歩主義教育運動の農本主義的側面－』(宇佐美 1969)を参照されたい。本論文は上記の「自然学習の思想」を訳した宇佐美寛によるベイリの自然学習の教育運動としての社会的な側面を評論した論文である。このなかで宇佐美(1969)は従来のベイリの「自然学習」の理論や実践に関する研究では論究されてこなかったベイリの思想全体における自然学習の位置づけ、思想形成に影響し、その思想が指し示していた社会、自然学習が社会の中でどのように作用し、どのような結果を残したか、についての解明を試みている。

2. 自然学習からの広がり

『自然体験論－農山村における自然学校の理論－』(国民教育研究所 1976)が対象としている大井沢小中学校は現在でも自然学習を行っており、全国的に広く知られている学校である。本実践は身近な村の中から集めてきた植物、動物の死骸を剥製の標本にして理科室に飾り、「郷土室」と呼ばれる標本室をつくったことにその始まりをみる

ことが出来る。その後、「郷土室」は博物館として地域住民に公開され、さらに魚の養殖やミツバチの飼育などの取り組みを通して第一次産業との関係性を深め、それらの自然学習の成果を「峠の小道」という本にまとめてゆく実践などが本文献で報告されている。これらの大井沢小中学校での実践は単なる「自然学習」実践としての活動ではなく、自然保護教育、教育運動などの多面的側面を持った地域学習としての活動と捉えられる。岩田(2013)は、本実践の多岐にわたる活動は「地域再生運動」の中での学習とその指導として捉えるべきものであると述べ、「地域の自然保護活動としての自然調査研究活動に取り組んだこと」「地域再生活動を学校活動にとどめず、地域住民全体のものに広げたこと」「自己検証システムを備えていたこと」「組織体系を整えていったこと」の四つの点を重要な特徴として挙げている。(石山雄貴)

Ⅲ. 自然体験

1. 自然体験学習の変遷

自然体験学習の源流は「ネイチャースタディ」、「天然資源保全教育」、「野外教育」である。

「自然体験学習論～豊かな自然体験学習と子どもの未来」(朝岡幸彦・降旗信一編 2006)には、自然体験学習の源流、目的、概念といった事柄やそれに関する様々な観点からの理論および学校内外の自然体験学習の実践や持続可能な教育として1992年の地球サミットの開催地であるブラジルのアマゾンでの事例が報告されている。アマゾンはその生物多様性の豊かさと森林開発の深刻さの双方で象徴的な存在とみられ、それは、自然体験学習だけでなく持続可能な開発のための教育について研究するにあたり、重要な示唆を与えてくれる。

2. 自然体験学習における地域指導者の役割と評価基準

1970年代半ばになると、地域を意識した自然観察会の指導者育成に重点が置かれるようになってきた。「自然体験学習・自然保護教育の地域指導者」(自然体験学習実践研究会 2011)は、自然

保護教育における地域指導者養成の変遷過程について様々な角度から述べられている。また「自然体験学習における指導者養成と発展過程」(岡島成行 2007)は、文献レビューを中心に日本の自然体験活動の歴史及び指導者養成カリキュラムの現状を整理したうえで、諸外国の事例を参考に自然体験活動の課題を明らかにし、指導者養成の今後の方向性を考察している。さらに「自然体験学習系環境教育の地域指導者の現状と課題」(朝岡幸彦・降旗信一編 2007)では、自然体験学習系環境教育の地域指導者のあり方として、主体を地域住民自身とすることの重要性とその学習方法として機能する指導者養成制度の現状を明らかにしている。

具体的な地域の取り組みとしては、「学校での自然体験学習におけるカリキュラム編成の課題—北海道厚岸郡浜中町における自然体験学習事業の事例分析(Ⅱ)—」(小玉敏也 2011)で教師と地域教育施設が共同で企画運営した自然体験学習を児童・生徒がどう評価しているのか、一地域で長期的に実施された自然体験学習の経験が、児童・生徒の地域観にどのように影響しているのかについて詳しく述べられている。また「長期自然体験が児童の内発的動機づけに及ぼす影響」(蓬田高正・飯田稔・井村仁・関智子・岡村泰斗 2000)では、子どもの自ら学ぶ力を育成することにおいて重要な意味を持っている内発的動機付けに自然体験がどのような影響をあたえるかについての解明を試みている。学校等での効果の実証に関しては、谷井淳一ら(2001)は「小学生用自然体験効果測定尺度の開発」において自己判断力、自然への感性、リーダーシップ、対人関係スキル、自己成長性の5つからなる測定尺度の開発をしており、それは自己が狙いとしたプログラムが当初の意図通りに達成されたかどうかを検証する基礎的資料として利用できる。

一方、「自然体験論—農山村における自然学校の理論—」(野田恵 2012)は、実践の中でローカルな自然体験学習の意義を明らかにするために「自然体験効果測定尺度」などの量的手法では限界があるとし、ライフヒストリー研究の手法を用

いて、自然体験学習の教育的意義について明らかにしている。

3. 自然体験学習の場としての自然学校の役割

動植物と身近に触れる自然観察の場として、自然学校が担う役割は大きい。「ESD拠点としての自然学校—持続可能な社会づくりに果たす自然学校の役割—」（立教大学ESD研究センター監修 2012）は、持続可能な社会に尽くす自然体験の役割を豊富な実践報告が実践者の考察を交えて論じられている。資料も豊富で、自然体験の拠点として重要な自然学校の動向、現在の到達点を理解するうえで必読と言える。

また自然体験学習の導入・実施には経験豊富な指導者とプログラムが不可欠であることから、自然学校に専門家組織として様々な期待が寄せられている。「自然体験学習実践における青少年教育の現状と課題—自然学校の成立と発展に注目して—」（降旗信一 2005）では、自然学校の成立と発展を踏まえ、自然体験学習実践における青少年教育の課題として、市民的公共性の確立や地域の教育力の文脈として位置づけることや、「教育と持続可能性」の視点からの再編の必要性等が述べられており、これからの自然体験学習が目指す方向性がまとめられている。（石山雄貴・丸谷聡子）

IV. 自然観察・自然観察会・動植物

日本の環境省が2002年に出した「中山間地域等における自然体験活動等を通じた地域活性化方策調査」において、「自然体験活動の受け入れ体制となる施設や組織を特に自然学校と呼ぶこととした。」（環境省 2002）ように、自然学校は自然体験学習の実践組織として認識されている。

経済発展に伴って都市化が進み、人と自然は離れつつある。特に子どもの自然離れ、体力低下などの問題が表面化している。自然体験学習は自然との触れ合いを通じて、学校教育及び社会教育の現場において仲間づくり、自己発見、心身の鍛錬などの機会を提供しながら、自然保護などの環境教育の理念を伝えてきた。これらの事を実証的に示した著作が、『『自然体験学習』の授業づくりと教師の成長—自然史系博物館職員と連携した授業

づくりの事例の検討」（藤井・渡邊 2009）、「教員や保育士の養成課程における自然体験学習の意義と授業カリキュラム」（宮野 2009）である。この著作は、自然体験学習及び自然学校の実践が青少年の心身成長に寄与、豊かな人間性を育てる役割を果たしていることを示している。

わが国の自然観察会は、財団法人日本自然保護協会の柴田敏隆と金田平が1955年に三浦半島自然保護の会を結成し、地域の自然観察を通して自然保護思想を広める活動を実施したことに始まる。浜口哲一・小川潔が中心となり執筆した「自然観察のあゆみ—「自然観察会」15年史—」（自然観察会 1983）には「自然観察会」とは今でこそ普通名詞として通用しているものの、まだそのような言葉のなかった時代にこの言葉を会や活動の名前にし、手本となる存在が三浦半島自然保護の会にしかない状況で試行錯誤をしながら活動を行った歴史が書かれている。

上記の三浦半島自然保護の会、自然観察会を経て平塚市博物館で活動を行った浜口哲一の『自然観察会の進め方』（浜口 2006）には、実際に自然観察会を行う上でのさまざまな心がけるべき事柄が具体的に書かれている。参加者を案内するリーダーは「本当の先生である自然との仲立ち役」であることや、リーダーとして自分を磨く際にキーワードとなるものは「好奇心」であり、「自分が特に関心を持って詳しく調べていく専門をもつことはもちろん大事である。しかし、一方で何事にも目を向ける好奇心も忘れないようにしたい」等の記述は現場に携わる立場の人間の意識に大いに役立つことだろう。

浜口は「環境に関わる問題を解決していくためには、自然科学の専門家だけでなく、さまざまな立場で仕事をしていて、なおかつ自然環境への関心が高い人が増えることが必要だと痛感する」、「これからの自然保護には、動植物の専門家、生態の専門家などと同じ重みでその場所の専門家が活躍する必要がある」と述べ、自然観察会の実施の持つ意義を主張している。

また、『自然観察ハンドブック』（日本自然保護協会 1984）では、自然観察の3つの要素とは、「自

然に親しむこと」「自然を知ること」「自然を守ること」であるという。自然観察会の目的は、自然科学の研究者を育てるためのものではなく、「高度な知識をもったひとにぎりの専門家を育てるよりも、自然保護を理解する多くの人が育ち、広い分野で活躍するほうがより望ましいのではないか」という。自然観察会を通して育てようとするべきは、「特殊な自然に詳しいマニアではなく、もっと身近なありふれた自然からいろいろな情報を読み取ることのできる人である」とも記されている。自分の地域にじっくりと向き合うことや五感を使って自然を見ること、自分のフィールドを見る仲間をつくることの重要性などは浜口の主張と共通している。

本書にも上記のような内容のほかに実際の自然観察の現場において役立つであろう、フィールドの種別に実践できる自然観察会の内容、自然観察Q&A、フィールドマナー、自然観察園の管理と運営、自然観察路の設計と運営などの知識が豊富に盛り込まれている。これは日本自然保護協会の『自然観察指導員ハンドブック』（日本自然保護協会 1978）に続く自然観察指導員用のテキストを一般向けに印刷し直したものであり、監修・編集は当時の指導員養成システムを中心であった金田平、柴田敏隆、青柳昌宏らによる。現代の観点から自然保護や自然観察会について記された日本自然保護協会の指導員養成のテキストとしては『自然かんさつからはじまる自然保護』（日本自然保護協会 2001）がある。（李曉曄）

V 自然保護・自然保護教育・指導者

1. 自然保護教育と先駆者

1978年、日本自然保護協会は自然観察指導員の養成システムを発足させた。その最初の教科書となったのが『自然観察指導員ハンドブック』である（日本自然保護協会 1978）。テレビやインターネットのある今でこそ自然に関する情報はいくらでも調べることができるため観察会の指導員は現場でのノウハウを中心に勉強するが、当時はそうではなく生態系についてなどの情報も書かれている。当時を知ることのできる資料として役立つ文

献であるといえる。

1960～70年代とは日本において自然保護というものについて議論された初めの時代であり日本における自然保護教育の基本が確立することとなるが、1960年代に学術会議の開いた自然保護というテーマでの連続した会議の最後には自然保護教育について下泉重吉などが集まって議論を行った。その内容を改めて書籍として出版されたのが『自然の保護』である（福島要一編 1975）。これは環境教育・自然保護教育・自然保護問題について勉強する際の基礎として読むべき文献である。また、1973年頃までの文献の要約を読むには『自然保護教育の歴史と現状、今後の問題』を参照されたい。また、『自然保護教育論』には小川による当時の自然保護教育をめぐる考察がなされている（小川 1977）。時代が下り、日本自然保護協会の活動範囲を超えた新しい広がり可能性を求めた日本ナチュラリスト協会の15年にわたる活動については、「1970年代から80年代にかけての自然保護教育の方法論的模索—日本ナチュラリスト協会の実践史より—」に書かれている（降旗 2008）。

1960年に日本自然保護協会の理事となり、自然保護教育の歴史を考える上で下泉重吉は欠かせない人物の一人である。彼の伝記『自然に学び、自然に従い雑草のように力強く』は下泉に関する研究、下泉の広めた自然保護教育、下泉に影響を受けた人々について書かれている（下泉美冬 2003）。生物教育の専門家であった下泉重吉の自然保護教育観の下敷きには生態学があったが（小川 2009）、それは当時自然保護に取り組んだ人々（青柳昌宏等）の持つ共通の意識でもあった。彼の始めた科学教育研究会の会誌『SEF 科学教育通信』創立50周年記念特別号は下泉に関する特集である（財団法人科学教育研究会 2000）。

小川(2009)によれば、三浦半島自然保護の会を1955年に創設した金田平・柴田敏隆は自然保護教育という名称で自他とも呼ぶ環境教育の一領域を築いた。柴田の考える自然保護教育の歩みは『証言、自然保護のあゆみ』に書かれている（柴田敏隆 1985）。また、『ビアンキ動物記』は三浦

半島自然保護の会の発行するニュースの元となった(ヴィタリー・ビアンキ著 タカクラロー訳 1968)。

2. 地域の教育指導者

他に指導者の実践の記録として『自然保護教育のすすめ』(三浦国彦 1988)、『自然保護は何を保護するのか』(山岡寛人 1994)がある。前者は旭川の中学校の教員が大雪山の自然保護運動に加わる過程で自然観察会のようなことを始め、自然保護運動とは独立した団体としてアーシアンクラブ旭川を創設し、子どもに向けた自然教育を始める。その視点が他の自然観察会と大きく異なるのは歴史を何万年という規模である自然史のレベルで見るという点である。そこには北海道という土地の歴史性も反映されている。後者の山岡寛人も三浦邦彦と同じく山への道路建設に対する反対運動をきっかけとし、生物と地理の知見を生かし自分たちの生活の歴史として自然を見るという考え方を持っている。また『千葉の干潟を守る会・大浜清の軌跡』は大浜清の自然保護活動家としての個人史である(小林宏子・小川潔 2008)。また、大学生の活動に関する文献としては『東京教育大学野外研究同好会の自然保護教育実践をふり返る』(伊東 2007)、『自然保護教育のこころみー野外研20年の足跡ー』(東京教育大学野外研究同好会 1983)が存在する。

3. 自然保護・自然保護教育の現在

そもそも自然保護において守るべき自然とはどのようなものかということを考えさせられるのは『自然を守るとはどういうことか』という文献である(守山 1988)。本来ブナ林の下に生えるカタクリが縄文時代の焼き畑により東京以南にも生育していることを例とし、自然とは人間との関わりの中で維持されてきた部分を持つということが分かる。そしてあらためて今、小川潔がこれまでも振り返って『【講演】環境教育学を考えるために』において語った「地域にへばりついて市民と共に個別具体的環境教育」という立場(小川 2012)を受け、その英語圏環境教育との接点を探るのは『小川潔先生の環境教育パイオニアワークに触発されて環境教育について考えるー環境教育の基本

的構成要素を巡ってー』である(原子 2012)。

また、これまでの自然保護運動とそれに密接に関わる具体的な地域や人間、自然保護教育の歴史に加え現代からこの先の可能性については『自然保護教育の成立過程』(伊東・小川 2008)、『自然保護教育の歴史と展開』(小川・伊東 2008)、『自然保護教育から派生する環境教育の視点』(小川 2009)、『自然保護教育論』(小川ほか編 2008)に総合的にまとめられている。また、近年の文献としては『森林環境教育と自然保護教育』(比屋根 2009)、『保全生物学に立脚した保全教育の立場から』(小堀 2009)、『現代自然体験学習の源流としての自然保護教育実践におけるESD的視点の検討：1970年代のナチュラリスト運動に着目して』(降旗 2007)等が存在する。(加賀芳恵)

Ⅵ. ライフヒストリー・ライフストーリー

本章ではライフストーリー・ライフヒストリー研究に関わる文献を数点紹介する。その後、この方法論についての理解を助けるために質的研究法に関する文献にも触れる。

『成人学習理論の新しい動向ー脳や身体による学習からグローバリゼーションまでー』は、生涯学習、特に成人の学習に関連した「語り・ナラティブ」について独立した章を設けている(メリアム編 2010)。この章では、ナラティブが経験に意味を付与し、アイデンティティを構築する方法と考えられている事が解説されている。参考文献も多数紹介されているが、英文が中心である。この本の訳者による『生涯学習の理論』にも「ナラティブ学習」についての独立した章がある(立田ほか 2011)。より平易な解説で、参考文献も邦文あるいは邦訳されたものが紹介されている。以上の2冊は、経験を基礎とした学習や成人の意識変容を研究する時、ナラティブがどのように重要な位置を占めるのか理解する手助けになる。また、ナラティブが、学習の方法論としても研究手法としても可能性を持つことが論じられている。『やまだようこ著作集 喪失の語り』は心理学の領域においてライフストーリー研究を蓄積してきた著者の著作集である(やまだ 2007)。本書は特に「喪

失」「死」にまつわる語りとその論考がまとめられている。ごく普通に生きる人々が、人生で起きる出来事・経験をどのように意味づけるのか、端的に理解できる名著である。『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』は、初学者にとって分かりやすい解説書である(桜井、小林編著 2005)。特に質的研究に対して向けられる「客観的ではない」という批判に対して解説を行い、量的研究と質的研究のそれぞれの長所、限界をまとめた箇所は参考になる。『ライフヒストリーの教育学』は、ライフヒストリー研究の背景から方法、倫理規定や研究者のジレンマ、インタビューの準備まで、研究を始める際に重要な情報がまとめられている(グッドソン 2006)。内容も教師のライフヒストリーを扱っており、参考になる部分が多い。

環境教育研究において、ライフストーリー・ライフヒストリーを手法とした研究については、本号で野田が紹介した。加えて、自然保護運動実践家のライフヒストリーを紹介する。小林昭幸の『野の鳥は野にー評伝・中西伍堂』は、「日本野鳥の会」の創設者、中西悟堂の一種の伝記である(小林 2007)。中西のライフヒストリーはこの他に「日本野鳥の会創設者『中西悟堂』」(西村 2007)や中西本人が自分史を記述した『野鳥開眼』がある(中西 1993)。野鳥保護運動にその半生を捧げた中西の思想は、日本の自然保護教育の発展に貢献した金田平・柴田敏隆に受け継がれているが、その背景を知るために、このようなライフヒストリーは研究対象として興味深い。

ライフストーリー・ライフヒストリーは質的研究法の一つである。環境教育および自然体験学習研究は、他の個別科学と同様にこれまで客観主義、実証主義が支配的であったように思われる。環境教育研究において構成主義的アプローチを提唱している Tilbury と Walford は、当事者が持つ文脈や語りの中に埋め込まれた主観的な要素や意味を解釈することに質的研究法は強みを発揮すると述べている(Tilbury & Walford 1996)。その一方で、質的研究法はフィールドワークの方法における信頼性やデータの解釈における研究者の恣

意性、それに基づく研究成果の妥当性をめぐって外部からは常に批判的な見解が示されてきた。このような質的研究法に纏わる困難を排するために、研究対象や分析手法について十分な説明を行う姿勢が質的研究者には必要である。また場合によっては研究技法の短所を補完するように研究技法を組み合わせるマルチメソッドあるいはトライアンギュレーションが有効である(佐藤郁哉 2006)。

『質的調査法入門ー教育における調査法とケーススタディ』は、副題にあるように教育領域でよく用いられるタイプの質的調査法を取り上げ、質的調査法のデザイン、質的データの収集技法と分析、調査報告について具体的な事例を挙げて解説しているので、初学者にも読みやすい内容である(メリアム 2004)。『質的研究ハンドブック』は質的研究法の全貌を知り、近年の質的研究法をめぐり研究動向を知ることができる(デンジン・リンカン 2006)。(野田恵・秦範子)

引用・参考文献

- 明石市立花園小学校, 2004, 『「連携」で拓く新しい授業・新しい学校の姿』, 「第3章 連携による「地域の環境を見つめた単元創造」の実践」, 東洋館出版, 東京, 170pp.
- 青柳昌宏, 1975, 「自然保護教育の歴史と現状, 今後の問題」, 『生物教育学会紀要』, 1-32.
- 朝岡幸彦・降旗信一(編), 2006, 『自然体験学習論ー豊かな自然体験学習と子どもの未来』, 高文堂出版社, 東京, 266pp.
- 朝岡幸彦・降旗信一, 2007, 「自然体験学習系環境教育の地域指導者の現状と課題」, 『自然体験学習実践研究』, 1(1):5-25.
- ヴィタリー・ビアンキ, 1968, 『ビアンキ動物記4 森の新聞春と夏(タカラタロー訳)』, 理論社, 東京, 374pp.
- ヴィタリー・ビアンキ, 1968, 『ビアンキ動物記5 森の新聞秋と冬(タカラタロー訳)』, 理論社, 東京, 374pp.
- ベイリ, L.H., 1972, 『自然学習の思想』(宇佐美寛訳), 明治図書, 東京, 164pp.

- デンジン, N.K., リンカン, Y.S. 編, 2006, 『質的研究ハンドブック1巻 質的研究のパラダイムと眺望』(平山満義監訳, 藤原顕編訳), 北大路書房, 京都, 431pp.
- デンジン, N.K., リンカン, Y.S. 編, 2006, 『質的研究ハンドブック2巻 質的研究の設計と戦略』(平山満義監訳, 藤原顕編訳), 北大路書房, 京都, 327pp.
- デンジン, N.K., リンカン, Y.S. 編, 2006, 『質的研究ハンドブック3巻 質的研究資料の収集と解釈』(平山満義監訳, 藤原顕編訳), 北大路書房, 京都, 463pp.
- EECS研究会, 1975, 「自然観察会における評価の研究」, 『EECS研究報告』, 1: 1-16.
- 藤井浩樹・渡邊和成, 2009, 「「自然体験学習」の授業づくりと教師の成長—自然史系博物館職員と連携した授業づくりの事例の検討」, 『自然体験学習実践研究』, 1(2): 37-49.
- 福島要一(編), 1975, 『自然の保護』, 時事通信社, 東京, 254pp.
- 降旗信一, 2005, 「自然体験学習実践における青少年教育の現状と課題—自然学校の成立と発展に注目して—」, 『ESD環境史研究』, 4: 32-40.
- 降旗信一, 2007, 「現代自然体験学習の源流としての自然保護教育実践におけるESD的視点の検討: 1970年代のナチュラリスト運動に着目して」, 『ESD環境史研究』, 6: 30-40.
- 降旗信一, 2008, 「1970年代から80年代にかけての自然保護教育の方法論的模索—日本ナチュラリスト協会の実践史より—」, 小川・伊東・又井編『自然保護教育論』, 筑波書房, 東京, 103-121.
- 降旗信一, 2009, 「農山漁村における環境教育指導者養成カリキュラムの課題—北海道厚岸郡浜中町立霧多布湿原センター 職員の分析—」, 『自然体験学習実践研究』, 1(2): 21-36.
- 降旗信一, 宮野純次, 能條歩, 藤井浩樹, 2009, 「環境教育としての自然体験学習の課題と展望」, 『環境教育』, 19(2): 3-16.
- 降旗信一, 2012, 『現代自然体験学習の成立と発展』, 風間書房, 東京, 252pp.
- グッドソン, I.・サイクス, P., 2006, 『ライフヒストリーの教育学』(高井良健一・山田浩之・藤井泰・白松賢訳), 昭和堂, 204pp.
- 浜口哲一, 2008, 『自然観察会の進め方』, エッチエスケー, 71pp.
- 原子栄一郎, 2012, 「小川潔先生の環境教育バイオニアワークに触発されて環境教育について考える—環境教育の基本的構成要素を巡って—」, 『環境教育研究』, 12: 155-166.
- 日置光久・露木和男・一寸木肇・村山哲哉(編), 2009, 『復刊 自然の観察』(原書 文部省, 1941, 『自然の観察』), 農山漁村文化協会, 東京, 548pp.
- 比屋根哲, 2009, 「森林環境教育と自然保護教育」, 『環境教育』, 41: 79-80.
- 伊東静一, 2007, 「東京教育大学野外研究同好会の自然保護教育実践をふり返る」, 『ESD・環境史研究』, 6: 69-77.
- 伊東静一・小川潔, 2008, 「自然保護教育の成立過程」, 『環境教育』, 18(1): 29-41.
- 岩田好宏, 1979, 「自然科学の教育における授業の典型3生物教育の場合」, 『講座日本の学力7巻 自然・社会』, 日本標準東京, 138-159.
- 岩田好宏, 2006, 「野生生物保全教育とは」, 『野生生物保全教育入門』, 少年写真新聞社, 6-45, 東京.
- 岩田好宏, 2006, 「おわりに—これからの課題」, 『野生生物保全教育入門』, 少年写真新聞社, 東京, 244-247.
- 岩田好宏, 2013年, 『環境教育とは何か—良質な環境を求めて』, 緑風出版, 東京, 228.
- 財団法人科学教育研究会, 2000, 『SEF科学教育通信』(創立50周年記念特別号), 12: 2-18.
- 金田平(編), 2001, 『自然かんさつからはじまる自然保護』, 日本自然保護協会, 東京, 153pp.
- 環境省自然環境局, 2002, 「中山間地域等における自然体験活動等を通じた地域活性化方策調査」, pp76.
- 小林昭幸, 2007, 『野の鳥は野に—評伝・中西伍堂』, 新潮社, 東京, 219pp.
- 小林宏子・小川潔, 2008, 「千葉の干潟を守る会・大浜清の軌跡」, 小川・伊東・又井編『自然保護教育論』, 筑波書房, 東京, 61-79.

- 小堀洋美, 2009, 「保全生物学に立脚した保全教育の立場から」, 『環境教育』, 19(1):77-78.
- 小玉敏也, 2009, 「自然体験学習に関する教員の力量形成の課題—北海道厚岸郡浜中町における自然体験学習事業の事例分析—」, 『自然体験学習実践研究』, 1(2):5-19.
- 小玉敏也, 2011, 「学校での自然体験学習におけるカリキュラム編成の課題—北海道厚岸郡浜中町における自然体験学習事業の事例分析(Ⅱ)—」, 『自然体験学習実践研究』, 1(3):31-48.
- 国民教育研究所, 1976, 『自然学習—大井沢小中学校の実践—』, 草土文化, 東京, 348pp.
- メリアム, S.B., 2004, 『質的調査法入門—教育における調査法とケーススタディ』, (堀薫夫・久保真人・成島美弥訳), ミネルヴァ書房, 京都, 389pp.
- メリアム, S.B.(編), 2010, 『成人学習理論の新しい動向—脳や身体による学習からグローバル化まで—』(立田慶裕ほか訳), 福村出版, 東京, 147pp.
- 三浦国彦, 1988, 『自然保護教育のすすめ』, あずみの書房, 宮城, 130pp.
- 宮野純次, 2009, 「教員や保育士の養成課程における自然体験学習の意義と授業カリキュラム」, 『自然体験学習実践研究』, 1(2):51-66.
- 守山弘, 1988, 『自然を守るとはどういうことか』, 農山漁村文化協会, 東京, 260pp.
- 中西悟堂, 1993, 『野鳥開眼』, 永田書房, 東京, 282pp.
- 日本自然保護協会, 1984, 『自然観察ハンドブック』, 平凡社, 東京, 424pp.
- 日本自然保護協会, 1978, 『自然観察指導員ハンドブック』, 日本自然保護協会, 東京, 239pp.
- 日本鳥類保護連盟, 1995, 『私たちの自然』, 400号記念号, 『私たちの自然』, 36(3).
- 西村眞一, 2007, 「日本野鳥の会創設者『中西悟堂』」, 『自然体験学習実践研究』, 1(1):115-119.
- 野田恵, 2012, 『自然体験論—農山村における自然学校の理論—』, みくに出版, 東京, 246pp.
- 小川潔, 1977, 「自然保護教育論」, 『環境教育研究』, 『環境情報科学』, 6(2):63-69.
- 小川潔, 1978, 「自然観察会における環境教育の可能性」, 『環境教育研究』, 1(1):37-45.
- 小川潔, 1992, 「野外観察会の歩みと方向性」, 本谷勲ほか編『環境教育事典』, 労働旬報社, 東京, 604-610.
- 小川潔, 2002, 「環境教育としての自然観察会の再評価」, 小川・伊東・又井編『自然保護教育論』, 筑波書房, 東京, 122-147.
- 小川潔, 2009, 「自然保護教育の展開から派生する環境教育の視点」, 『環境教育』, 41:68-76.
- 小川潔, 2012, 「【講演】環境教育学を考えるために」, 『環境教育研究』, 12:101-140.
- 小川潔・伊東静一, 2008, 「自然保護教育の歴史と展開」, 『自然保護教育論』, 筑波書房, 東京, 9-26.
- 小川潔・伊東静一・又井裕子(編), 2008, 『自然保護教育論』, 筑波書房, 東京, 175.
- 岡島成行, 2007, 「自然体験学習における指導者養成と発展過程」, 『自然体験学習実践研究』, 1(1):39-51.
- 立教大学ESD研究センター(監修), 2012, 『ESD拠点としての自然学校—持続可能な社会づくりに果たす自然学校の役割—』, みくに出版, 東京, 312pp.
- 桜井厚・小林多寿子(編著), 2005, 『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』, せりか書房, 東京, 204pp.
- 佐藤郁哉, 2006, 『フィールドワーク増訂版—書を持って街へ出よう』, 新曜社, 東京, 281pp.
- 柴田敏隆, 1985, 「証言 自然保護のあゆみ」, 日本自然保護協会三十年史編集委員会編『日本自然保護協会三十年史』, 日本自然保護協会, 東京, 62-364.
- 自然観察会, 1983, 「自然観察のあゆみ—「自然観察会」15年史—」, 『自然観察会会報』, 70:1-51.
- 自然体験学習実践研究会, 2011, 「自然体験学習・自然保護教育の地域指導者」, 『自然体験学習実践研究』, 1(3):122.
- 下泉美冬, 2003, 『自然に学び、自然に従い雑草のように力強く』, 財団法人科学教育研究会, 東京, 207pp.

- 菅井啓之, 2004, 『ものの見方を育む自然観察入門 - 理科教育の原点を見つめて』, 文溪堂, 岐阜, 151pp.
- 谷井淳一他, 2001, 「小学生用自然体験効果測定尺度の開発」, 『野外教育研究』, 5(1):39-47.
- 立田慶裕・井上豊久・岩崎久美子・金藤ふゆ子・荻野亮吾・佐藤智子, 『生涯学習の理論 - 新たなパースペクティブ -』, 福村出版, 259pp.
- Tilbury, D. and Walford, R., 1996, Grounded Theory: Defying the Document Paradigm in Environmental Education Research, *Understanding Geographic and Environmental Education: The Role of Research*, 51-64.
- 東京教育大学野外研究同好会, 1983, 『自然保護教育のこころみ - 野外研20年の足跡 -』 東京教育大学野外研究同好会, 東京, 223pp.
- 東京教育大学野外研究同好会・お茶の水女子大学野外研究会, 1976, 『高尾自然教室』, 76pp.
- 宇佐美寛, 1969, 「L.H.ベイリの「自然学習」 - アメリカ進歩主義教育運動の農本主義的側面 -」, 千葉大学教育学部研究紀要, 18:43-55.
- 宇佐美寛, 1972, 「解説」, 『自然学習の思想 (ベイリ, L.H. 著)』, 明治図書, 東京, pp149-162.
- やまだようこ, 2007, 『やまだようこ著作集 喪失の語り』, 新曜社, 東京, 302pp.
- 山岡寛人, 1994, 『自然保護は何を保護するのか』
- 蓬田高正、飯田稔、井村仁、関智子、岡村泰斗, 2000, 「長期自然体験が児童の内発的動機づけに及ぼす影響」, 『野外教育研究』, 3(2):13-22.